

分は南洋のある事業に従事してゐる處から隨つて南洋地方へ遊ぶことが多い、そこで見聞する事柄は皆本國の我が日本の學者識者の調査を煩はしたいこと許である、自分は一日も早く諸君が南洋研究に従事せられ、併せて作爲的に陥りやすい小細工の日本趣味の傍ら自然ななとして清淡な南洋趣味を翫味されんことを切望するのである。

(了)

義太夫節 表情派の凋落

桃栗山人

非常な悪聲でゐながら上手の太夫と稱へられてゐた大阪の竹本彌太夫は、去る十月三十日七十歳を一期として黄泉の客となつた。彌太夫の経歴は、既に各新聞にも出て、大方の人は御存知のことと思ふ。彼れは

堀江遊廓木谷席の主人で木谷傳次郎と云た人。家業柄にも似ず、頗る濃厚篤實な長者で、青樓の主人としては勿論のと、藝人として將た大阪市人としても立派な人格を有し且多少の文字もあり、自分の家業の世に擯斥せらるゝを慨し、子息等はいづれも中等以上の教育をなし、現に會社銀行員、豫備士官、工科大學生などがあるのを見れば、藝人として此の翁の一見識ある人なるとがわかる。

されば藝道以外他から尊敬されて、多年因講の取締に推され、義太夫界の牛耳を把てゐたのであるが、本年春以來たま／＼病を得て濱寺公園に靜養中、去る十月十四日、翁とは以前多少の因縁のあつた明樂座より出火し、其の風下に當つて堀江の自宅は類焼の禍に罹り、よし其の事件は病床なる老翁の耳には入れなかつたとするも、火災より僅に二週目を隔て氏の世を辭したのは重ね／＼の不幸といはねばならぬ。多少の面識ある予は、翁の訃を聞て哀悼の情禁

じ難く、殊に藝人としては稀なる好人物を失ひしを惜み、演藝界の爲には此の翁の物故によりて、義太夫節表情派の未運を悲むのである。

こゝに義太夫節の表情派といふは、予が假に附したる名稱。先づ其の系統に就て一言すれば、東京では豊竹生駒太夫などの主唱する「義太夫は歌ふものではなくて語るものである、義太夫は老若男女出て来る人物は勿論、

其の場合／＼に情を表すやう語るを名人とも上手ともいふ」と彼の歌浄瑠璃一派を排斥する聲と一致するもので、彌太夫は實に此の派の先輩として老功として、竹本津太夫及び生駒太夫等と共に、何れも其



竹本彌太夫

の代表者であつた。しかしながら此の派の主唱する如く、義太夫節は決して歌ふものではなくて、語りの一天張であるものなるかは頗る疑問である。それは誰も知る如く、義太夫節の根元には、語るものと歌ふものとの二要素を含めるとは今更喋々を俟たぬ。其の歌浄瑠璃となり表情派となるも必竟は、音聲の美悪、技倆の長短によりて其の一を撰ん

だもの外ならず、圓滿の發達を遂げた義太夫節とはいふとが出來ないので、詳しくいへば、唯聲の美しいものは、歌趣味に傾き、聲なきものは詞の研究を積んで表情を主とするに至つたので義太夫節の本來は、

甲乙表裏完全の聲に依つて、節も詞も愁も艶も何も彼も具備したものでなくてはならぬ。此の聲の圓滿なる美を發揮したのが元祖の義太夫其の人で、彼れは天性の美音を以て、平家の語り物を父とし、謡曲の謡ひ物を母とし、それに説經や祭文等の節物を加味した淨瑠璃より、更に一流を語り出したので、元祖の當時にありては、語り物謡ひ物の要素は合れをりながら、其の語るといふも、今日表情派の所謂劇的に、其の詞の如きも臺詞的に語るとは自ら性質を異にし、恰も女性の詞の今もなほ其の半は節を有しをるが如く、男性の詞にも節を附て謡つたものらしいとすれば、義太夫節の最初にあつては今日の所謂歌が、つたものかと思はれる。少くとも表情派のいふやうな語り口とは全く違ふ、美く流暢に節を附けて謡ふのが主で、人物の性格などを表すにはまだ至らなかつたとは明白である。然るに二代目の義太夫、初名若竹政太夫、後に播摩少掾と受領し、世に上手

播摩といはれた人から、詞によりて人物の性情を表すとを工夫して義太夫節に一生涯を開いたのであるけれども其の工風鍛錬より得たる一流といふは、むしろ變則のものであつたといふまでもない。元祖義太夫は音聲の聖ある。今日より當時の狀を推想するとは難しいが、いかなる聲の種類でも此の人の咽喉に響へられてゐないものはなかつたらしい、實に天才である所から其門下にも又いろ／＼の方面に俊才を出したのだ。就中師の聲の美しい點のみを有したのが、豊竹の始祖若太夫であつた。けれども師の圓滿なる聲を有してゐたのは一人もなく、若竹政太夫の如きは、聲の低い爲に師から排斥を受けたくらゐてある。

此の若竹政太夫は、大阪島の内三津寺町の住人で中紅屋長四郎といひ、羽冠の頃より筑後掾に就て淨瑠璃の稽古をなし、稍上達し我も許し他も許すに至つたので、師に頼んで芝居へ出勤をしやうとしたとこ

ろが、筑後掾は許さなかつた。何故許さなかつたかといへば、其の頃は、一日の淨瑠璃を筑後掾は一人にて四段も續けて語り、座に多くの太夫を要しなかつたのも一理由には違ひないが、重なる原因は政太夫の小音の故である。此一事によりても、音聲にかけて元祖が比類なき達人であつたと、又當時の淨瑠璃は上手巧者で語るものではなくて、聲を第一としたのが窺はれる。

で政太夫は、或意味では師に對して反旗を翻してをる東座に投じ、若太夫の芝居へ出勤したのである。

此の間の消息は今日得て知るとは出来ないが、師に容れられず政太夫の憤慨はいかばかり、彼は其の怒を藝道に移して、大いに奮勵をしたが、音聲ばかりは天性、人力の及ぶところでない。唯爲すべきは工風鍛練にありと、一心不乱に研き上げた藝は即ち、其の詞によりて男女の性格を語り分け、又其の場合場合において、喜怒哀樂の情を表すとを發明したの

である。これがうど人形遣中興の祖といはる、初代吉田文三郎と時を同じうし、折しも歌舞伎發達の時運に伴つたから、政太夫が劇的表情的語り口は大いに世人の注意を惹て、義太夫節は聲のみによりて節廻しを面白く語るといふ外に、表情的新工夫のあることを知らしめ、人形淨瑠璃は更に一段の發達を遂げたのである。

それゆゑ師の筑後も我を折て、これを西座に迎へ、重く用ひて自分の後繼者に擬したのである。此の政太夫の成功は、淨瑠璃の上にも變化を及ぼし、近松作は一層劇的に發展することとなつた。彼の『丹波與作』の『道中双六』の如き、『國姓爺合戦』の如き、皆政太夫の語り物として有名である。又デン通に皮肉もの、一に數へられてをる『新薄雪』の『三人笑ひ』の如き、政太夫の語りはじめたので、今日も政太夫の型の遺つてゐるものは決して少くない。實に藝園の奇傑である。が其の此所に至つたのは、或事情即

ち自分の聲の悪かつた結果で、つまり變則の發達に過ぎない。元祖の淨瑠璃は天才の藝、到底聲なくて眞似るとが出来なかつたのを、政太夫は人工習慣によりて一流を語り出し、義太夫節はひとり聲のみで語るものでないといふ先例を開き、惡聲小音者の爲に福音を傳へたのであつた。

一方には、元祖の天才に似てやゝ小なる若太夫は、其の美しい音聲を以て、艶物を語り、依然として流暢の節を存し、今日の所謂歌淨瑠璃の脈は、おのづから此の系統によりて繋がれてゐたのである。然に政太夫は、正徳元文の間、義太夫節最盛の時期に際會し長く西座の座頭として勢力を有し、門下も多く集り、其の弟子共は聲の美惡に拘らず、悉く師の衣鉢を傳へたのであるから、西派は表情を主として、東流の聲調派と自然區別するに至つた。

けれども後には西も東も混亂し、一本調子の唯聲の美なるは艶物を語り、聲の無いものは政太夫の聲に

習つたので、惡聲を以て名人上手といはれた人も少なくなかつた。六代目の内匠太夫の如きは惡聲の名人として有名なものである。しかし是等はいつれも完全な太夫とはいはれぬ。其の長所を以て僅に短所を補つてゐるまでである。

聲も佳く表情も巧み、近世圓滿な太夫といへば先づ長門太夫に指を屈せねばならぬ。これも又義太夫界の偉人である。次は四代目の春太夫、これらが眞の名人といはるゝ部分。斯いふ聲も表情も兼備へた太夫は、今は全く跡を絶て了つた。攝津大掾の如き、表情のやゝ巧みになつたのは晩年のとて、それも女性もしくは老人に限るので、ドスは全く聲にないのである。されば一派の人からは歌淨瑠璃視されてゐる。但し歌淨瑠璃は明治の趣味で、彼が今日の成功は全く時勢の寵兒となつたからで、義太夫界は靡然として型を頼して其の流風を追つたのも時の勢である。

これに反して表情派は勢を失し、長門系に屬する彌太夫、綱太夫系に屬する津太夫、染太夫系に屬する生駒太夫など、僅に西風の命脈を保つてゐたのであるが、今や其の有力なる一人が缺けて、前途の心細さを覺ゆるのみである。彌太夫の計を聞き、表情派の運命を悲みて、こゝに聊か感慨を述べたのである。

(なはり)

印度の戯曲

姉崎 正治

印度の芝居の事を話せと仰しやるのですが、何の益に立つかは別問題として、一つだけ戯曲の事を話しましやう。

茲にお話しします「石灰車」といふのは、シェード

ラカといふ人の作ですが、その人の年代や事蹟は少しも分かりませぬ、曲はチャールダッタといふ金持ちの零落した善人と、遊女のヴサンタセーナ(春軍、春雨太夫ともいひましやうか)とを主人公とした、十齣から出来た曲です、

第一はチャールダッタの家の場で、主人がその友人のマイトレヤと自分の零落の愁嘆をいつてをる、そこへ國王の義弟のサンスターナカは一人の従者をつけて、春雨を追ふて来る、春雨は逃場を失つて、チャールダッタの裏門に飛び込み、自分の寶玉類を此の家に預けて去る、

第二は春雨の家でその下女のマダニカーとチャールダッタを見初めた話などしてをる、又そこへ一人理髪屋が博奕にまけて、その相手に追はれて来て、此も春雨の家へ逃げ込む、それから話しをきくと此の理髪屋はチャールダッタの家で先に僕をしてをつたと知つて春雨は博奕のしろを拂つてやる、そこで理